

*BUSHIDO, BUDO<sup>1</sup> Y BU: UN ACERCAMIENTO  
FILOSÓFICO*

*BUSHIDO, BUDO<sup>2</sup> AND BU: A PHILOSOPHICAL  
APPROACH*

武士道、武道、武——その哲学的あらまし

Ueno Taisuke<sup>3</sup>

上野 太祐

Universidad de Estudios Internacionales de Kanda (Japón)

神田外語大学

---

今日の常識的理解に照らせば「武」とはまず以て大量殺戮の暴力を指す。それは、かつてウィンストン＝チャーチルが『世界の危機』のなかで説いた電話一本で何千もの兵士や女・子どもを皆殺しにし、果ては人類自身をも絶滅へと追いやる力をもった技術のことである。「武力による威嚇又は武力の行使」の永久放棄を謳ったわが国の憲法が、この理解をはっきりと代表している。現代のわれわれの武には、殺しの技術以上の何物をも含意されてはいない。だが、武とはそれほど無機質で底の浅いものではない。

わが国では武を担い武に秀でた者はかつて武士と呼ばれた。彼らはきわめて特異な力をもつ者としておそれられていた。平安朝のなかごろ、すなわち十世紀前半にはその存在がみとめられてはいるが、起源は必ずしも定かでなく、近年およそ以下二様の理解がなされている。ひとつは有力者の莊園を侵略から護るために武装した在地領主たちが成長したという見方、もうひとつは朝廷で武芸を担っていた貴族たちが地方反乱平定のために向かったさきで土着したという見方である（現在は後者の説が有力）。よく知られた源氏・平氏は、もとを正せば皇族の端くれであったが、一般に武を担う貴族

---

[1] Nota del traductor: Preferimos usar el término japonés frente a la traducción “artes marciales” porque el primero encierra un comportamiento y forma de vida específicos de la cultura japonesa.

[2] Nota del traductor: Preferimos usar el término japonés frente a la traducción “artes marciales” porque el primero encierra un comportamiento y forma de vida específicos de la cultura japonesa.

[3] Profesor titular de la Universidad de Estudios Internacionales de Kanda.

たちの位階は当初決して高くはなく、所詮は上級貴族にさぶらふ（＝侍ふ）者——samuraiの語源——であった。血や死を穢れとして忌む習俗に加え、殺生を嫌う仏の教えが広がりつつあった世の中で、修羅道に墮ちることをも厭わず平然と殺しを繰り返す彼らの姿はさぞ異様であったろう。とはいえそうした武士のおそろしさは、単に殺しの残忍さにのみ求められたわけではあるまい。神威の宿る研ぎ澄まされた刀を振りかざし、靈異を呼ぶ弓で矢合せをする呪的感性を具えていた彼らは、恐れのみならず畏れの対象でもあったはずである。

武士は妻子や一族をもとに、主従関係に貫かれた集団を形成して活動していたが、戦闘に及んでは無論己の実力だけで勝ち続けねばならなかった。その実力は名として人々の記憶に刻まれた。「名」は「夕」やみで己が何者かを「口」で告げるさまから名前を表す漢字だが、日本ではさらに土地の意味が加わった。かつて荘園内の耕作地は名（みょう）田（でん）と呼ばれ、これを管掌した武士は実力で己の土地を占有・拡大していった。十六世紀の戦乱期に登場した地域支配者たちを大（だい）名（みょう）と称するのは、この意識を引き継いでいる。武士の名前は、こうした土地を礎にしなが、職（しき）（＝官位や職位）、帰属する一団、一族の系字、一族内の位置といった要素で構成されていた。大（おお）庭（ば）平（へい）太（た）景（かげ）能（よし）を例にとれば、「大庭」は相模（さがみ）国（のくに）の荘園の名前でここを治めた一族であること、「平」は勇猛で知られる坂東平氏に属していること、「太」は長男（＝太郎）であることを示し、「景能」からは先祖景（かげ）政（まさ）の字を受け継ぐ者であることが読み取れる（以上、菅野覚明『武士道の逆襲』）。要するに武士にとって名とは単なる記号ではなく、己の己たる根柢の凝集態、血肉そのものなのである。したがって不甲斐ない武士の名は刀のように折れ曲がり（＝名折れ）、その面目も潰える（＝名が廢る）。この意味での「名」を背負った武士の揮う実力が、本来わが国で捉えられていた武力の原形である。

いまその内実をさらによく考えるにあたり、従来看過されてきた武士の呪的感性に注目したい。合戦における戦闘の最小単位は無論個人だが、合戦の勝敗は一族の参じた集団の趨勢により決した。その意味で、武士の力たる武は必ずしも個人の実力のみには限定されず、戦闘集団全体に関わる兵法をも含み込んでいたと考えられる。兵法と聞くと刀さばきの技法がまず思い浮かぶが、元来は戦の仕方一般を指す言葉であった。武力による殺戮を科学の数式に依存する今日の感觸からすれば到底ナンセンスに感じられるだろうが、かつて戦の雌雄は人知の及ぶところでない超越的な事象と考えられていた。「戦争の時代」と規定される中世日本において、戦は軍神勧請に始まり、弓・刀・旗竿などあらゆる武具にその吉凶が映し出され、窮地を脱する神呪もまことしやかに流布していた。優秀な武将とは、人心の掌握のみならず天時の把握にも長けた者のことを言った（『兵法秘術一卷書』『兵（ひょう）将（しょう）陣訓要略鈔』）。武の道を究めることは単に己の技だけでなく、己の行く末をかぎ取る力を磨くことをも伴っていたのである。こうした

事情を踏まえると、史料上十三世紀頃には既に見られる「武道」の語が、今日想像される内容と質を大きく異にするであろうことは言を俟(ま)たない。

今日理解されるところの武道の源流は十五世紀後半にさかのぼる。この時期、弓術・剣術・柔術に秀でた者たちが流派武術を形作っていった。これらの武術は実戦から遠退いた天下泰平の江戸時代中期に、一事専心真理の会得を目指す道の思想と合流し、禅や儒の思想を積極的に取り入れ成熟した(以上、魚住孝至『武道と日本人』)。技の向上と己の鍛錬とを両輪とする武道はこうして形になった。重要な特徴は、この種の武道には戦のもった超越的性格がほぼ含まれていないこと、言い換えれば武の道が人間世界の問題としてのみ捉えられていることである。流派武術の形成はこの点で武の歴史の画期であった。しかし、武はやはり合戦の時代にこそその真の姿をみせ、切迫した生き死の瀬戸際、逃れえぬ宿命のなかで問われてきたことはもう一度見直されてよいだろう。武はかつて個人を超えた超越としてはたっていた。個人に集約された武はその一部分に過ぎない。いまやわれわれは事の性格をより見やすくするために、主語と目的語とを入れ替えて語ろう。すなわち人間が武を宿しているのではない、武が人間を宿しているのである。と。江戸中期に禅や儒の思想を積極的に取り込んだ武は、それを身に宿した人間の内側から自分自身を語る言葉を得た。しかし武は言葉を得るよりも前から、人間を宿していた。それは、いまだ武の内実を語るほどの言葉を得ていない中世の武士たちが生き死をかけて刀を振り、弓を射続けるという仕方それ自体を介して、武士の身体に姿を顕していたのである。否、むしろこのとき、言葉は不要であった。名と力とが武のすべてを物語っていたからである。

武が人間主体の道の追究として閉じていった時期は、武士道が言葉を得て行った時期と軌を一にしている。「武士道」の語は、慶長元年(一五九六)に初例が確認できる。享保元年(一七一六)に佐賀藩で成った『葉隠』の冒頭では、「武道の大意」を言下に答えられぬ武士の油断を歎き「武士道と云は死ぬ事と見付たり」と説かれている。一見、今日のわれわれにはここでの武道と武士道との差が必ずしも判然としないが、両者はやはり区別されるべきである。武士道は当の武士が己の在り方を省み、その自覚の上に武士たる者の実存を問うた思想だからである。したがって武士道は、武の原体験から一步引き剥がれた反省的思索により導かれた道であり、武が人間主体の道として突き詰められた到達点として位置づけられよう。

人間に限るにせよ超越に相(あい)渉(わた)るにせよ、根本的に武の道は教わるものではなく問うものであり続けた。しかし近世において人間主体の道として閉じつつあった武は、近代に入りいっそうその色合いを強め、性格も変わっていった。明治新政府が武士層を解体し、文明開化による文化・思想の近代化を進めると、従来の武術も技の理論化を図っていった。講道館を開いた嘉納治五郎による柔術の柔道化はよく知られた一例である。術から道への呼称変化の背景には、人間修養の強調があった。日露戦争での勝利をうけ、日本では学生を中心とした武道ブームが興り試合での勝敗を基準

に据えた競技化が進んだ。しかし一九四五年（昭和二十）に第二次世界大戦で日本が敗戦すると、アメリカを中心とした占領軍は占領政策の一環として民間の武器を没収し武道禁止令を出し公私問わず一切の武道活動が禁止された。すなわち、身に宿った武の根絶やし政策であった。このとき武道関係者は、従来の武道のスポーツ化・競技化を強調し武道復活の道を探った。結果として諸武道が再開されたのは一九五五年（昭和三十）前後であったという。ここで重要なことは、以上の占領政策にも明らかなどおり、二十世紀の様々な戦争の影響で武の理解は単なる暴力の技術として矮小化され今日に至るということである。武は、もはやかつての深みを喪ったのである。

武とは元来、単なる暴力ではない。それは、生き死をかけ己の内から問われることで初めて身体の表面に顕れ出る威容である。それは、殺し殺されることの肉迫した原体験や己の与り知らぬ運命に向き合うことで発見されてきた“力”であったと思われるが、殺す体験はおろか殺される体験からも遠ざかったわたしにはもとよりこれ以上のことを述べる力はない。ただあえてひとつだけ加えるとすれば、己の鍛錬を通じ、己が変容していくことを繰り返す武の稽古とは不断の問いかけであり、その意味では言葉を介さないひとつの哲学だということである。

## 【参考文献】

菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社、二〇〇四）

笠谷和比古「武士道概念の史的展開」（『日本歴史』三五号、二〇〇七）

魚住孝至『武道と日本人』（青春出版社、二〇一九）

『続群書類従』第二十五輯上武家部（続群書類従完成会、一九五九）。

『日本古典偽書叢刊』第三卷（深沢徹、大谷節子他編、現代思潮新社、二〇〇四）。

『定本 葉隠〔全訳注〕』上（佐藤正英校訂、吉田真樹監訳、筑摩書房、二〇一七）。

〔謝辞〕本稿は、JSPS科研費（19K12928）の助成を受けたものである。

Si pretendemos interpretar el significado de “Bu”<sup>4</sup> con el pensamiento y las ideas actuales, dicha letra representaría el concepto de violencia, de la magnitud de una masacre. Esto es algo similar a la ficción que supone la tecnología que Winston-Churchill, narra en su obra sobre la Crisis Mundial, donde una sola llamada de teléfono podía hacer que miles de soldados mujeres y niños murieran, empujando de este modo a la humanidad al borde de la extinción. La Constitución de Japón, que proclama la amenaza permanente de “La intimidación o el uso de la fuerza”, ilustra claramente este razonamiento. Nuestra guerra moderna en realidad implica poco más que derrotar la tecnología enemiga pero, el concepto que encierra la letra “Bu” no es tan mecánico ni superficial.

En nuestro país, los hombres que dirigían los ejércitos y sobresalieron en las guerras empezaron a ser llamados llamados “bushi”. Ellos era temidos por el pueblo porque se les consideraba poseedores de una fuerza y destrezas guerreras únicas. A mediados de la dinastía Heian<sup>5</sup>, es decir, en la primera mitad del siglo X, su existencia ha sido demostrada pero, su origen no siempre es tan claro, y en los últimos años han tomado fuerza las dos siguientes teorías.

La primera de ellas explica que un número creciente de hombres se fue armando para proteger la tierra de su señor de las invasiones exteriores. La otra opinión, (y con mayor aceptación), indica que los aristócratas que realizaban la práctica del Budo en en la Corte, en realidad eran indígenas que pretendían liderar la rebelión local. Un ejemplo conocido lo representan las familias Genji y Taira<sup>6</sup>, cuyos miembros una vez asentados en los puestos de poder pasaron a formar parte de la familia imperial. No obstante, al principio el grueso de los que marchaban a la guerra no eran dirigidas por miembros de la alta nobleza. Después de todo, la etimología de la palabra samurai viene del término “saburau” que significaba servir a la nobleza.

En un mundo donde las costumbres locales abominaban el derramamiento de sangre y rechazaban la muerte, por entenderse como sucios elementos, contrarios a las sagradas enseñanzas de Buda que se estaban expandiendo, la fría actitud de matar caprichosa y repetidamente, sin razón justificada, habría hecho caer al samurai en el peor de los infiernos<sup>7</sup>.

---

[4] Nota del traductor: En el original japonés “武”.

[5] Nota del traductor: La época Heian (784~1185)

[6] Nota del traductor: Las guerras Guempei, (1180~1185) es un periodo de batallas entre las familias Taira y Minamoto (Taira y Genji)

[7] Nota del traductor: El autor original, Ueno Taisuke, hace referencia a la vergonzosa situación que el budismo destinaba a aquellos que olvidaban sus obligaciones morales dentro del bushido.

Sin embargo, aunque existiera semejante individuo, no se puede decir que lo más temido de los samurai era simplemente la brutalidad necesaria en el cruento acto de matar.

Para muchos, la posibilidad de blandir una afilada katana donde se decía que moraban los dioses y poder lanzar las flechas que se consideraban guiadas por espíritus divinos, convertía al samurai en objeto de admiración y de temor. Los bushi, junto con su mujer, sus hijos y el clan al que pertenecían formaban comunidades y convivían en grupos basados en las relaciones con su señor, pero en la batalla, tenían que continuar ganando sólo con sus propias habilidades.

Su habilidad quedó grabada en la memoria de las gente como alguien cuyo nombre debiera ser recordado. La letra “na”<sup>8</sup> es un kanji que representa el nombre de la persona pero el dibujo original se forma con la “boca”<sup>9</sup>, de alguien que en “la noche”<sup>10</sup> pregunta; ¿Quién es usted?<sup>11</sup> Pero además de todo esto, en Japón se le agregó el significado de la tierra donde vivía.

En aquella época, las zonas cultivadas dentro de las posesiones del señor (feudal) se llamaban “myoden”, y el hombre que se hacía cargo de ellas terminó ocupándolas y expandiendo su terreno gracias a sus propias habilidades. Los grandes señores feudales, daimyos<sup>12</sup>, que aparecen en el siglo XVI tomaron este nombre porque siguieron las costumbres expansionistas de sus predecesores. Básicamente el nombre del bushi se basaba en la tierra a la que pertenecía, pero estaba compuesto de otros elementos como la ocupación (posición o rango oficial), clan al que pertenecía, linaje y posición dentro de la familia. Tomamos como ejemplo el nombre de Obaheita Kageyoshi<sup>13</sup>: “Oba” es el nombre de su residencia en el país de Sagami, conquistado por su clan. “Hei” hace referencia de pertenencia al temeroso ejército liderado por Bando Heishi. “Ta” es la primera sílaba que denota su nombre como hermano mayor (Taro). Finalmente, “Kageyoshi” fue tomado del nombre de su antecesor “Kagemasa” para anunciarlo como continuación de su estirpe<sup>14</sup>.

---

[8] En japonés 名 (traducción literal: nombre)

[9] En japonés 口 (traducción literal: boca)

[10] : En japonés 夕 (traducción literal: noche)

[11] En un excelente ejemplo filológico el autor original, Ueno Taisuke, nos muestra el origen etimológico de la palabra.

[12] Nota del traductor: En japonés 大名 (traducción literal: gran nombre)

[13] Nota del traductor: En japonés 大庭平太景能 (Obaheita Kageyoshi / Oba Kageyoshi) famoso jefe militar de la época Heian que destacó especialmente por su destreza en las artes de la guerra

[14] Nota del traductor: Recogido en el libro “Bushido no gyakushu” de Kanno Kakumyo,



En resumen, para el bushi, el nombre no era sólo una signo de identificación, sino una denominación coherente con sus orígenes, su procedencia y la sangre misma a la que pertenecía. Por estas razones, se puede entender que un nombre indigno para un bushi, sería como hacerle llevar una espada rota (nombre roto)<sup>15</sup> y mantener la cara deformada (nombre aplastado)<sup>16</sup>

En este sentido, el “nombre” que un bushi llevaba a cuestas, revelaba su capacidad y pasó a formar parte original de la definición de un tipo de fuerza militar que tomó forma en este país.

Llegados a este punto, al considerar los detalles, me gustaría prestar atención al estado psicológico, mágico o trágico, del bushi que a menudo se ha pasado por alto. Como es bien sabido, la unidad mínima en el combate es uno mismo, como ente individual pero, el resultado final de aquellas grandes batallas era determinado por los movimientos y cambios de estrategia del clan al que se pertenecía. En este sentido, se podría afirmar que la fortaleza y destrezas del bushi no quedaban limitadas por su propia capacidad personal sino que era un elemento que formaba parte de un grupo compacto de combate regido bajo normas y estrategias militares.

Para muchas personas este concepto de estrategia militar le traerá recuerdos acerca del manejo de la espada pero, originalmente era un término que sólo hacía referencia al modo de luchar.

Llegados a este punto, quisiera destacar que si pensáramos que actualmente, el hecho de llevar a cabo una masacre, o no, dependa de la tecnología y de una fórmula matemática que active el proceso, llegaríamos a la conclusión de se trata un disparate inadmisibles.

En el pasado, las batallas entre dos pueblos se consideraban hechos trascendentales que estaban más allá de un simple razonamiento humano.

En el Japón de la Edad Media, definido como un largo período de luchas, donde cada combate se comenzaba con ofrendas y plegarias al dios de la guerra. No sólo espadas y arcos, incluso astas de bandera se convertían en todo tipo de armas y por ellas, en manos de los hombres, circulaban los lamentos y maldiciones de aquellos dioses que deseaban salir de aquella situación. Un buen jefe militar debía ser una persona capaz de ganarse

---

(citado en el texto original)

[15] Nota del traductor: En un juego polisémico el autor muestra la relación de la expresión “espada rota” con la expresión “honor manchado” que se escribe con el mismo kanji.

[16] Nota del traductor: En otro juego polisémico el autor muestra la relación de la expresión “cara aplastada” con el término “nombre mancillado” que se escribe con el mismo kanji.

el corazón de sus hombres y entender los designios divinos<sup>17</sup>. El bushi consideraba que avanzar en el camino de la vía de “Bu”<sup>18</sup> no se limitaba al dominio de su técnica con las armas, también implicaba perfeccionarse a sí mismo como persona para alcanzar la meta deseada. Partiendo de esta situación, se puede observar que en los textos del siglo XIII donde aparece la palabra “Budo”, se recoge una interpretación de contenido y cualidades que distan mucho de la interpretación general en la actualidad. Básicamente, la fuente de las artes marciales, tal y como son entendidas actualmente se remonta a finales del siglo XV. Durante este período de luchas intestinas, aquellos que sobresalieron en las artes del manejo del arco, de la espada y la lucha cuerpo a cuerpo<sup>19</sup>, moldearon el concepto de “Bujutsu”<sup>20</sup> creando sus propias escuelas. A mediados de la época Edo, en un tiempo donde aquellas destrezas probadas en el combate se mantenían innecesarias gracias a la paz reinante, las ideas del Zen y del Confucianismo fueron adaptadas como elemento necesario para alcanzar una paz y serenidad interiores que indicaran el verdadero camino a seguir<sup>21</sup>. De este modo, empezó a considerarse que el “Budo” consistía en mejorar las habilidades técnicas y entrenarse, para dar forma a las artes marciales actuales.

Una característica muy importante que conviene destacar es que este tipo de artes marciales tiene poco o ningún carácter trascendental en la guerra, en otras palabras, para las artes marciales actuales la interpretación real del concepto de “Budo”, se ven como un problema de difícil aceptación en la sociedad actual. A este respecto, consideramos que la formación de las diversas escuelas de “Bujutsu” había sido un hito importante en la Historia de “Bu” pero, insistimos en este concepto sólo podrá mostrar su verdadera esencia en la batalla y en situaciones decisivas ante la vida y la muerte. De este modo, podríamos preguntarnos si con este concepto en práctica el destino escrito podría reescribirse con otro final.

Antiguamente, el concepto de “Bu” representaba algo que superaba con creces la capacidad individual del ser humano. El arte concentrado en un sólo individuo, no dejaba de ser una parte del todo.

---

[17] Nota del traductor: Recogido en el primer tomo de la enciclopedia “Heiho Hijutsu ikkansho” y el primer tomo de “Hyosho Jinkun Yoryakusho” (citados en el texto original)

[18] Nota del traductor: Recordamos la letra en japonés del título de este trabajo (武)

[19] Nota del traductor: En japonés “Jyu jitsu”

[20] Nota del traductor: A menudo traducido como “artes marciales” pero encierra una filosofía de vida y comportamientos que rechazan la competición y exhibición de fuerza.

[21] Nota del traductor: Recogido en el libro “Budo to nihonjin” de Uozumi Takashi, (citado en el texto original)



Llegados a este punto, intercambiaremos el sujeto y el objeto para que las cosas sean más fáciles de entender. En otras palabras, debemos entender que los seres humanos no viven en el concepto de “Bu”, es este propio concepto en el que debe anidar en el corazón de los seres humanos. “Bu”, que asimiló activamente el pensamiento del Zen y del Confucianismo a partir de mediados de la época Edo, hizo que aquellos que las adaptaron mostraran con sus actos y su comportamiento unas ideas que manaban naturalmente de su interior. No obstante, antes de que el significado de la palabra llegara a entenderse y reconocer que se había asimilado su significado, los bushi que luchaban en el período feudal ya lo portaban en su interior. Lo tenían cada vez que blandían sus espadas y lanzaba flechas con sus arcos en un campo de batalla donde las palabras resultaban innecesarias. Todo ello especialmente, porque el nombre y la acción de aquellas personas fueron los que dieron forma al concepto de “Bu”.

Cuando “Bu” dejó de ser objeto de interés para perfeccionar la propia existencia, una nueva etapa se abrió con el concepto de “Bushido”. Ha quedado demostrado que el uso del término aparece por primera vez en el primer año de la era Keicho (1596). Al principio del libro “Hagakure”, escrito en el feudo de Saga en el primer año de la era Kyoho (1716), se puede apreciar una frase muy relevante “El gran significado del Budo” y líneas abajo, unas sentencias explicatorias para aquellos que descuidaran sus obligaciones, “El Bushido es encontrar sentido a morir”. Aunque a primera vista, la diferencia entre artes marciales y “Bushido” no siempre fuera obvia para la mayoría de nosotros, no cabe duda de que los componentes de ambas disciplinas sabrían diferenciarlas con exactitud. El “Bushido” exige que el verdadero bushi reflexione sobre su razón de ser, el motivo principal de este proceder reside en la convicción de que dicho individuo duda del significado de la simple existencia como guerrero. Podríamos afirmar que la filosofía del “Bushido” dejando a un lado la experiencia básica de la lucha, reclamaba un pensamiento reflexivo del individuo y permitió que el concepto “Bu” se convirtiera en la meta final a la que llegar, a través de una vía de desarrollo centrada en mejorar las cualidades del ser humano. Ya sea desde el punto de vista de las limitaciones del ser humano o desde la trascendencia de los fenómenos naturales que escapan a su comprensión, básicamente, “Bu” no era un concepto que se pudiera aprender mediante lecciones magistrales, sino que algo que se podía alcanzar a través de buscar respuestas a las dudas que continuamente el bushi se formulaba. Sin embargo, con la llegada de los tiempos modernos, aquel camino o vía que se había creado para ayudar al ser humano en su desarrollo, empezó a encontrar dificultades para difundirse y tras la instauración definitiva de la

Modernidad, aquellas tendencias contrarias se fortalecieron y propiciaron un carácter alejado las ideas anteriores.

El Gobierno de Meiji<sup>22</sup> abolió la casta de los bushi, propició grandes cambios culturales y un pensamiento crítico cercanos al gusto occidental, al tiempo que pretendió formar un sistema teórico donde organizar un conjunto de todas las artes marciales. Un ejemplo bien conocido es el de Kano Jigoro, quien tras abrir las puertas del Kodokan<sup>23</sup>, hizo que el “Jyu-jitsu” tradicional se convirtiera en el judo actual. Detrás del cambio de nombre, de “arte” a “camino” estaba el deseo de enfatizar en la formación humana.

Después de la victoria japonesa en la guerra con Rusia, el auge de las artes marciales se disparó entre los estudiantes japoneses. El deseo de rivalizar se fortaleció considerablemente y el hecho de ganar o perder en las competiciones se convirtió en la base de las artes marciales. Sin embargo, en 1945 (año XX de Showa<sup>24</sup>) Japón fue derrotado en la Segunda Guerra Mundial y el ejército de ocupación americano, como medida disuasoria, determinó confiscar todo tipo de armas a la población y prohibir cualquier actividad relacionada con las artes marciales, a través de leyes oficiales. En otras palabras, era una medida política para erradicar la existencia de “Bu” en cualquier persona. Ante esta situación, las personas relacionadas con el mundo del “Budo” consideraron que para evitar su extinción sería buena idea promocionar las artes marciales como deporte de competición y de este modo, explorar una nueva forma de subsistencia.

Como resultado de este experimento, se dice que algunas de las artes marciales volvieron a ser practicadas alrededor del año 1959 (año XXX de Showa). Lo más importante de lo citado en estas líneas, reside en el intento por parte del ejército aliado de abolir las artes marciales japonesas mediante decretos. A lo largo del siglo XX ha habido muchas guerras y la influencia que ello ha aportado a la interpretación o de “Bu” ha hecho que hasta nuestros días, este concepto se menosprecie o se considere simplemente un modo de proceder violento. El sentido original y profundo de “Bu” hace tiempo que estaba vestido de luto. Su esencia no es la simple violencia. Es la dignidad que emana de las profundidades del alma humana desde que por primera vez, uno mismo se encuentra entre la vida y la muerte y se pregunta su razón de ser. Podríamos asegurar que es un “poder” que se descubre al experimentar el enfrentamiento con un destino

---

[22] Nota del traductor: La época Meiji (1868~1912)

[23] Nota del traductor: Edificio de ocho plantas que hace de sede central del judo en todo el mundo, desde que Kano Jigoro lo creara en el año XV de la época Meiji (1882)

[24] Nota del traductor: La época Showa (1926~1989)

cierto de matar o ser muerto pero, como en mi caso, la experiencia de matar se haya mucho más lejos que la posibilidad de morir, no tengo muchos más argumentos para seguir hablando. Si solo agregara uno más, sería para afirmar que la práctica de “Bu”, que se transforma repetidamente a través del entrenamiento, es una pregunta constante al ser interior, y en ese sentido, saber que no puede ser resumida en palabras se convierte en una muy interesante experiencia filosófica.

\*Traducción directa realizada del texto original en japonés a español por Arsenio Sanz Rivera. Profesor titular de la Universidad de Estudios Internacionales de Kanda.

## Bibliografía

- Kanno, Kakumyo. *Bushido no gyakushu*. Kodansha 2004.
- Kasaya, Kazuhiko. “Bushido gainen no rekishitennkai” Tomo 35. Enciclopedia *Historia de Japón*. 2007.
- Otani, Setsuko. Fukazawa Toru. “*Nihon koten Gisyoku Samurakan*”, tomo tercero. Gendai-shichoshinsha 2004.
- Uozumi, Takashi. *Budo to nihonjin*. Seishun 2019.
- Yamamoto, Tsunetomo. *Hagakure*, (1716). Traducción al japonés moderno por Sato, Masahide. Yoshida, Masaki. Chikuma Shobo 2017.
- “Zoku Gunsho Ruiju” cuaderno 250. *Zokugun Shoruiju* Kanseikai 1959

\*Agradecimientos al Ministerio de Educación, Cultura, Ciencia, Deportes y Tecnología de Japón por la ayuda económica a la investigación.